

文化14年十一月の隕石

On the Meteorite of November, 1817.

早稲田大學講師 瀧口 宏 *Hiroshi Takiguti.*

1

天空の現象として電光、鳴響、震動を伴ふ場合の隕石の落下は稀であり、衆人をして驚愕、怪異の念を抱かしめ、これが爲、古來屢々記録に残され、我國に於て既に日本書紀以下の史書に之れを認め得る如く、歐洲、支那に於ても皇紀初年に近い頃の落下記録を残してゐる。

2

文化14年(學曆1817年)十一月22日の江戸は、3日前からの快晴が続いてゐたが、晝すぎの未刻(14時)頃、突然西方に物すごい雷鳴の如き音響を聞き、爲に都人士は騒然として、その何物たるかを怪んだのである。この時、或者はこの音響に伴ひ“光り物”を目撃したとも云ふ。

當時、江戸に居住せる國學者小山田興清も亦此の怪響を聞き、その模様を下の如く日記に留めてゐる。(此の日記は擁書樓日記と稱し、文化12年〔1815〕七月より文政3年〔1820〕二月に亘る間のもので、自筆本が早稲田大學附屬圖書館に保存されてゐる。)

十一月22日。晴、午打さがるところ、富士箱根の方にあたりて、雷のごとききゞきあり。出て望むに、西南の空かきくもりて、何のゆゑといふ事をしらず。更にこれに就き、彼は同月28日、次の如く誌してゐる。

28日。雪、四時に晴ぬ。春登法師、赤澤内藏助まうでく。内藏助語云。22日の震動の時、武藏八王子近所の子安村、同大和田川原、日野の原の三所へ、三尺計の石、空より落たり。他所におちたるは全くして、地中三尺計も打こみたり。大和田川原なるは、石地へ落たれば、くだけたりといへり。そのくだけを人のもて來て見せたりしに、焼石のさま也きといへり。

この事件に就き、武江年表卷之七に於ても、次の如く取扱つてゐる。

十一月22日、晴天、未刻頃、江戸市中雷鳴の如き響して、光り物、空中を飛ぶ。(武州八王子横山宿の畑中へ落ちたり。長三尺、幅七尺、厚六寸程燻りたる石也) {() 内へ註記。}

松浦清、亦、此のことにつき、甲子夜話中に述べ、次の如き比較的詳細なる記載を残してゐる。

最早七八年ニモ成ケラン。是ハ晝ノコトニテ、此度ノ如キ音シテ飛物シタルガ、八王子農家ノ畑ノ土ニ大ナル石ヲユリ込タリ。其質焼石ノ如シトテ、人

々打碎テ玩ベリ、今度ノ碎片モ同ジ質ナリト、見タリシ人云キ、昔、星隕テ、石トナリシ杯云コトハ、是等ノコトニモアルヤ。造化ノ所爲ハ意外ノコトナリ。前ニ云フ七八年前ノ飛物ハ、正シク予ガ中ノ者見タルガ、其大サ四尺ニモ過ギナン、赤キガ如ク、黒キガ如ク、雲ノ如ク、火焰ノ如ク、鳴動回轉シテ中天ヲ迅飛ス。疾行ノアト火光ノ如ク、且ク餘響ヲ曳クコト二三丈ニ及ベリ。東北ヨリ西方ニ往タリ。見シ者、始ハ驚キ見キタルガ、後ハ怖テ家ニ逃入リ、戸ヲ塞ギタレバ、末ヲ知ラズト。

これは松浦清が友人林子氏より“十月8日夜戌刻(20時)過ぎ西天に大砲の如き響を聞き、音の北方に移るに従ひ、たゞちに北戸を開き見れば、尙北天に餘響轟ぬてあり。人傳てに當時通行せる者が光り物の飛ぶのを見たとき、又數日後には、早稻田の御家人の玄關に石落ち、屋根を抜き、碎片飛散せる事件の同時刻に起りしを知る”と話され、同事實の記載をなし、更に數年前の隕石に言を及ぼしたものである。この記述は文政6年〔1823〕十月のことで、文化14年を隔る6年後であり、尙當時の人士に強き印象を與へてゐたのであらう。

3

先年、筆者は友人平野元三郎氏と共に、下總國分寺の調査中、同寺藏文書中より、はからずもこの隕石に關する實見者の記録を得たのであつて、これに依れば、次の如く、隕石の落下せる諸部落より、訴狀として、實物(殘欠)と共に、役所に提出せるものにて、概ね前諸記録と符合し、當時の模様を髣髴たらしめ得るものである。

乍恐以書付御訴奉申上候

- 一、武州多摩郡八王子横山宿ノ内子安宿名主彦右エ門年老半右エ門一同奉申上候。當月廿二日快晴ニ御座候處未之刻頃空中ヨリ如雷鳴地響震動致シ當宿之内上野原宿金剛院脇畑ヘ其節怪數物落候様子ニ付、早速罷越見届候處畑ニ雪有之五六尺四方ヘ泥劔候様子ニ相見ヘ地中四尺程窪ク罷成候間打寄掘出候處大サ凡長三尺横六七寸之大石ニ而外廻リ黒勿論落候響ニテ悉ク割候様子ニ有之空中鳴響候後而凡(?)貳三間四方程有之候者東北之方ヨリ西南之方ヘ飛去消失申候。餘リ不思議之儀ニ付右欠石相添御訴奉申上候以上

文化十四年丑十一月廿五日

當御代官所

武州多摩郡	子 安 宿
八王子横山宿	柚 木 村
ノ内	栗 澤 新 田
	豊 田 村
	大 和 田 村

右四ヶ村總代

名主 彦右エ門

年老 半右エ門

小野田三郎エ衛門様

御 役 所

尤も、この文書は訴書の寫ではあるが、價值上、著しい差のあるものではない。(文中、畑に雪有之は同月19日降雪せることを 擁書樓日記に依り知り得る。) 勿論、この隕石は、文中に在る如く悉く割れ、又、甲子夜話に示される如く“人々打碎テ遊び”一片として現在その所在を明にし得ず、従つて隕石そのものに關する學術的調査は勿論、目撃者凡てが斯かる事象に慣れざる爲、落下狀況に於ても甚だ不満足なる記述を以てなされてをる。

然し乍ら、當時のこれ等の現象に對する一般人士の態度の一端を知り、又、更らには、この埋れたる隕石の一片たり共、舊家の片隅より發見される機を與へ得るならば、この冗文發表の目的を達して、大いに餘りあるものと云へるのである。(早稲田に落下せりと云ふ文政6年〔1823〕の隕石に關しては、筆者の知れる限りに於て他に何等の記録をも残してゐない。)

問 答

問： 或る書物に、“水星は現在も計算に合はない公轉軌道をめぐつてゐるが、それは、水星と太陽との間に未知遊星が有るためであらう。若し、そうなれば、計算的に、未知遊星は8等級ぐらゐであらう”と出てゐました。今も水星の軌道は計算に合はないのですか？ 又、水星と太陽との間に遊星は存在しますか？ (朝鮮 U.-M.)

答： 今から73年前の學曆1869年九月に佛國のルゼリエが此の未知星のことを學會に提議したのでした。それは、水星の軌道の近日點がニウトンの引力說で計算した結果よりも百年間に38"ばかり進み過ぎることを解くためでした。しかし、今日まで此の星は發見されてゐません。ところが今から30年ほど前、アインスタイン氏が相對論の計算から此の近日點の運動を解説しましたので、最近は未知星を誰も信じなくなりました。しかし、十九世紀後半から今世紀初までは、日蝕の度毎に此の星の搜索を熱心にやつた人々もあり、仲々評判ものでした。(Q)

鏡面のアルミニウム鍍金

京都山科の關西光學研究所では創立以來鏡面アルミニウム鍍金につき研究を進めてゐたが、最近その完成を見、優秀な成績を収めるやうになつた。鏡面アルミニウム鍍金は種々な點で銀鍍金に優り、殊に寫眞望遠鏡では不可缺のものとされてゐる。學界並に一般天文愛好家の熱望に應へる同研究所の貢獻は、日本の理學進歩のために、大きいものがあらう。